

# グローバル時代における多重知能理論の再考：研究推進のための予備的考察と提言

Rethinking Multiple Intelligences Theory in the Age of Globalism: A Preliminary Study and a Proposal for Further Research

大西 好宣

ONISHI Yoshinobu

## 要旨

1983年、ハーバード大学のHoward Gardnerは、言語的知能、論理数学的知能、音楽的知能など計7種類の知能から構成される多重知能理論を発表した。当該理論については、言葉の定義等を含め主として海外において様々な批判があるものの、さらなる研究及び同理論に基づいた教育実践が欧米及びアジアで広く展開されている。しかしながら、当該理論がもともと心理学を基盤としているためか、わが国の教育現場では現在に至るまで余り馴染みがなく、わが国の初等・中等教育特有の「教科」という強固な基盤をなかなか超えられないでいる。そこで本稿では、グローバル化のための諸政策を進める現代の日本において、多重知能に関する当該理論が果たしてどのような意味を持つのかについて改めて考察し、研究を進めるためのヒントを複数提示しつつ、演繹的アプローチによるもの、帰納的アプローチによるもの各々について研究のための具体的な提言を行う。

## 1、はじめに

わが国ではそれほど馴染みがないものの、多重知能（以下MI=Multiple Intelligences）及びその理論に基づく研究や教育実践が海外では広く展開されている。世界で初めてMI理論を唱えたのは、ハーバード大学教授のHoward Gardner（1983）である。彼によれば、人間が持っている知能は、当時一般的であったIQに代表される単一的で計測可能な知能ばかりではなく、本来もっと多様であるという。

そこで本稿では、グローバル化のための諸政策を進める現代の日本において、MI理論が果たしてどのような意味を持つのかについて改めて考察し、研究を進めるためのヒントを提示しつつ、具体的な提言を行いたい。

## 2、目的と方法論

本稿の目的は、日本では現段階で余り馴染みのないMI理論について、1) 先行研究をもとにその内容と国内外の現状を紹介し、2) 国内における研究を促進するための具体的なヒントを複数提示した上で、3) ある程度具体的な提言を二つ行いたい。

本稿はあくまで、将来の具体的な研究に結びつけるための予備的考察という位置付けであるため、方法論と呼べるほどのものはない。けれども、先行研究を最大限に活用しながら、筆者独自の視点を提供することでそれに代えたい。

## 3、先行研究など

### 3-1 MI理論

MI理論の提唱者Howard Gardner（1983）による初出文献のタイトルには、知能を表す

単語が intelligences と複数形で用いられていることが注目される。当初、Gardner が提唱した7つの知能は概ね以下のような内容であった。

(1) 言語的知能

話し言葉と書き言葉への感受性、言語を学ぶ能力、及びある目標を成就するために言語を用いる能力

(2) 論理数学的知能

問題を論理的に分析したり、数学的な操作を実行したり、問題を科学的に究明する能力

(3) 音楽的知能

音楽的パターンの演奏や作曲、鑑賞のスキル

(4) 身体運動的知能

問題を解決したり何かを作り出したりするために、体全体や身体部位を使う能力

(5) 空間的知能

広い空間のパターンを認識して操作する能力や、より限定された範囲のパターンについての能力

(6) 対人的知能

他人の意図や動機付け、欲求を理解して、他人とうまくやっていく能力

(7) 内省的知能

自分自身を理解する能力。自分自身の欲望や恐怖、能力も含めて、自己の効果的な作業モデルを持ち、そのような情報を自分の生活を統制するために効果的に用いる能力

Gardner (1999) は後に博物的知能、霊的知能、実存的知能の3つを追加の候補として挙げており、今日、Gardner の MI という際には当初提唱した7つと後の博物的知能を含む8つの知能を指すことが多いようである。これらをまとめたものが以下の表1で、わかりやすいよう各知能を体現する職業等の具体例も含めた。

表1 Gardner による MI

	名称	内容	具体的な職業等
1	言語的知能	言葉への感受性、言語を学び用いる能力	弁護士、演説家、作家、詩人
2	論理数学的知能	論理的な分析、数学的操作、科学的究明の能力	数学者、論理学者、科学者
3	音楽的知能	音楽的パターンの演奏や作曲、鑑賞のスキル	
4	身体運動的知能	体全体や身体部位を使う能力	ダンサー、俳優、スポーツ選手
5	空間的知能	空間のパターンを認識して操作する能力	航海士、パイロット、彫刻家等
6	対人的知能	意図や欲求を理解し、他人とうまくやっていく能力	教師、臨床医、俳優等
7	内省的知能	自分自身を理解する能力	
8	博物的知能	自然や人工物の種類を見分け分類する能力	博物学者、生物学者等

出典 松村 (2001) による邦訳版より筆者作成

### 3-2 MI 理論に対する批判

MI 理論は 1983 年に公表されて以降、Gardner 自ら「それ以来私はそれについて何百回も話してきた」と語るほど、大きな評判を呼んだ。しかし彼自身は元々、心理学を専門とする学者であったので、その理論が有名になるにつれ、教育学の分野からも心理学の分野からも批判が湧き起こった。

その最大のもは、多重理論のそもそもの出発点である、複数の新たな知能の定義に対する懐疑である。White (2005, 2006) によれば、Gardner によって新たに定義された幾つかの具体的な知能という分類自体が恣意的だという。科学的な知見に基づかない、単なるアイデアなら誰もが思いつくではないかという批判である。

用語の定義に関する批判もある。Sternberg (1983, 1991) らは、Gardner が用いた知能 (intelligence) という言葉が、伝統的な意味を離れ、本来であれば能力 (ability) 或いは適性 (aptitude) と呼ぶべき領域まで含んでしまっていることを問題視している。

さらに本質的な批判は、MI 理論の正当性を示す実証データの不足である。Sternberg (1994) や Gottfredson (2006) によれば、多くの実証データが蓄積されている IQ とは異なり、MI 理論には何らの科学的な根拠もないという。この点については Gardner 自身も認めており、今に至るも大きくは改善されていない。

### 3-3 海外における MI 理論の発展

学術界からのこうした多くの批判にも関わらず、また Gardner 自身が「MI 理論は、教育的な処方ではまったくない」と述べているにも関わらず、MI 理論は教育の実践面で今日まで様々に用いられて来た。その最たるものは Gardner 自身によるハーバード大学でのプロジェクト・ゼロである。プロジェクト・ゼロは 1967 年に哲学者 Nelson Goodman によって開始され、今日まで続く長期的かつ先進的な教育実践で、Gardner 自身は MI 理論の発表翌年である 1984 年からこれに参加している。

ここでは、「私たちの知能の組み合わせはそれぞれ独自である」<sup>1</sup> という自身の理論に基づき、画一的な教育を一切廃し、子供たちの個性に応じた多様なスタイルの教育を実践している。さらに、これに呼応する形で、プロジェクト・ゼロ以外でも MI 理論に基づく教育を行う MI スクールが全米に誕生した。ニュー・シティ・スクールなどの例をはじめ、Gardner 自身もこれらの学校を訪れ、その教育実践に協力している。

阪井 (2018) によれば、中国や韓国、フィリピンにおいても MI 理論が指導原理として用いられており、実践研究も多いという。但し、欧州におけるオランダ等の例も含めその対象は専ら幼児や初等・中等教育であり、高校生以上、とりわけ高等教育を対象とする実践例や研究は非常に少ないという。

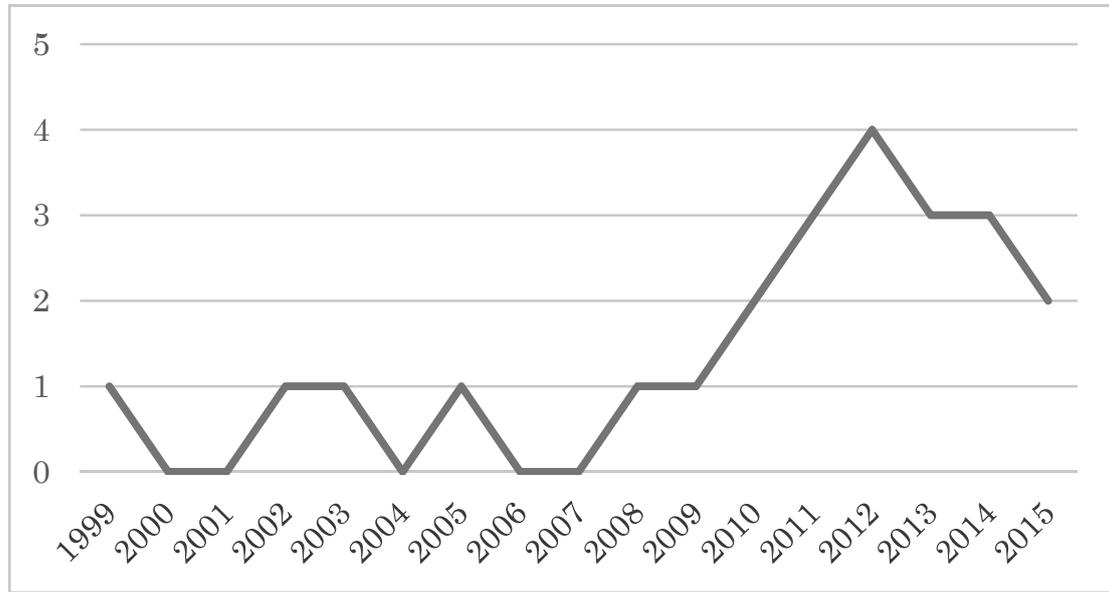
### 3-4 日本における MI

本稿冒頭で、わが国における MI 理論研究はそれほど馴染みがないと述べたが、阪井 (2018) は「近年、ようやく日本においても多重知能理論に注目が集まり始めている」と述べ<sup>2</sup>、その証拠として、文部科学省の科学研究費に採択された件数が以下のグラフ 1 のよ

<sup>1</sup> 松村 (2001) p.63.

<sup>2</sup> 阪井 (2018) p.266.

グラフ1 「多重知能」で検索した科研費の採択件数



出典 阪井 (2018) p266

うに増加傾向にあることを示す。

確かに、そうした流れを裏付けるような出来事は近年複数あった。一つは2016年7月の明治大学における国際シンポジウム「International Symposium on Multiple Intelligences in Meiji University: Spreading and Deepening Multiple Intelligences Theory」であり、もう一つは2017年3月の電子情報通信学会における「MI理論シンポジウム～日本におけるMI理論の展開と未来～」と題した特別企画である。

しかしながら、文部科学省の科学研究費に採択された件数について筆者が調べてみたところ、グラフ1にある2015年度の後、つまり2016年度及び2017年度は共に2件、そして2018年度は1件と結局1990年代の水準に戻ってしまい、国内におけるMI理論の研究が増加傾向にあるとはとても言い難い現状である。前記の阪井は、わが国でMI理論が普及しない理由として以下の3つを挙げている<sup>3</sup>。

- (1) 多重知能理論の研究は心理学に偏る傾向があり、教育理論の中心に位置付けられていない。
- (2) 学校教育の場で実践する余地が少なく、実践されても既存の教科の枠組みを超えることがない。
- (3) 学校教育より幼児教育・英語教育・そろばんなどの学校外での教育活動（教育ビジネス）で取り込まれる傾向がある。

#### 4. 考察と提言Ⅰ：演繹的手法による連携研究の可能性

これまで見て来たように、Gardnerによって提唱されたMI理論の応用と実践、研究を巡っ

<sup>3</sup> 阪井 (2018) p.269.

では、諸外国と日本国内との間に決して小さくない溝が存在する。この現状に風穴を開け、少なくとも海外と同程度の、或いは日本独自の実践と研究を進めるためには、ちょっとした発想の転換が今求められているのではないだろうか。

そこで、本稿が提唱するのはグローバル人材とリベラルアーツという隣接する2つの研究対象との有機的な連携である。

#### 4-1 隣接する研究対象1：グローバル人材

近年、わが国の教育界を席卷している最大のキーワードは、MIよりもむしろグローバル人材であろう。概ね2010年以降、高等教育を中心として様々な実践と研究が行われ、多くの論考が発表されている。教育界ばかりでなく、経済・産業界からの期待や注目も大きい。

グローバル人材の公的な定義とはそもそもどのようなものであろうか。大西（2018a）によれば、「行政府である中央省庁によるグローバル人材関連の議論には、推進する主体の違いによって二つの大きな流れがある」。その二つとは、経済産業省によるものと文部科学省によるもので、これまで、グローバル人材の公的な定義としては両省によるものが頻繁に引用されて来た。そのうちまず、わが国におけるグローバル人材論の嚆矢とも呼ぶべき、経済産業省（2010）による定義が以下である<sup>4</sup>。

グローバル化が進展している世界の中で、主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って互いを理解し、更にはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し、相乗効果を生み出して、新しい価値を生み出すことができる人材

他方、経済産業省より少し遅れて議論を始めた文部科学省（2011）は、「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」を組織し、その最終報告書の中でグローバル人材を次のように定義した<sup>5</sup>。

世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間

さらに両者を取りまとめたものが、首相官邸（2012）による以下の定義である<sup>6</sup>。文章にはなっておらず、グローバル人材に必要な能力を列挙する形となっているのが特徴である。

#### ○要素I： 語学力・コミュニケーション能力

<sup>4</sup> 経済産業省（2010）p.31.

<sup>5</sup> 文部科学省（2011）p.3.

<sup>6</sup> 首相官邸（2012）p.8.

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ（ママ）

- このほか、（中略）幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等

2010年代の『グローバル人材』と1990年代の『国際人』との差異を指摘するのは藤山（2012）である。藤山は1988年の文部省（当時）による『我が国の文教政策』と2012年の首相官邸による審議のまとめ『グローバル人材育成戦略』を比較し、『語学力』『異文化理解』『日本人としてのアイデンティティ』については、表現の違いを除けば基本的に同一だが、「語学力のウェイトが以前に比べて大きくなったこと」がグローバル人材の特徴だと述べる。また、さらなる大きな違いとして、「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」という首相官邸定義の要素Ⅱにある文言が、1988年の『我が国の文教政策』にはないことも同時に指摘した。

#### 4-2 MI理論とグローバル人材像との共通点

これまでのことを踏まえれば、MI理論とグローバル人材には互いに重なり合う多くの共通点があることがわかる。例えば、MI理論で言う言語的知能とは、グローバル人材の定義にある語学力・コミュニケーション能力に他ならない。おそらくはグローバル人材の定義にあるメディア・リテラシーの一部も、MI理論の言語的知能に含まれるであろう。それ以外の項目の共通点についても、筆者なりにまとめてみたものが次の表2である。

表2では、身体運動的知能のみ、グローバル人材の定義で対応するキーワードが空欄となっている。けれどこれも、身体運動的知能を21世紀における新たなタイプの教養或いは専門性と捉えれば、グローバル人材の定義で言う「教養と専門性」が当てはまってくる。実際、例えば西山（2016）、菊池（2016）らは医療／看護職の立場から、自らの身体を知るところを「身体知」として定義し、リベラルアーツ科目にしようといった主張を展開しているほどである。

表2 MI理論とグローバル人材像との共通点

	MI	グローバル人材のキーワード
1	言語的知能	語学力・コミュニケーション能力、メディア・リテラシー
2	論理数学的知能	自分の考えをわかりやすく伝える、メディア・リテラシー
3	音楽的知能	教養と専門性、新たな価値を創造する能力
4	身体運動的知能	
5	空間的知能	新たな価値を創造する能力
6	対人的知能	チームワーク、協調性、リーダーシップ
7	内省的知能	日本人としてのアイデンティティ、チャレンジ精神
8	博物的知能	教養と専門性

#### 4-3 隣接する研究対象2：リベラルアーツ

一種のブームとなった観のあるグローバル人材ほどではないにしろ、リベラルアーツも近年わが国の高等教育において注目を浴びる分野である。早稲田大学、上智大学、千葉大学、国際教養大学など、今世紀に入って新設された大学や学部にリベラルアーツ、教養或いは国際教養という名前を冠したものが多く目に付くのはその証左である。2011年には日本国際教養学会も開設されている。

山田（2013a、2013b）及び宮田（1991）らによると、リベラルアーツは古代ギリシャの発祥とされ、やがてそれが古代ローマへと伝わった後、17世紀の英国を経て、現代の米国へと継承されたい。いずれの場合も、当時の覇権国で隆盛を極めたという点が興味深い。

他方、吉見（2016）によれば、初期のリベラルアーツは、文法・論理・修辞の言語系3学と、算術・幾何・天文・音楽の数学系4学で構成されていた。いわゆる自由7科（Seven Liberal Arts）である。

#### 4-4 MI理論とリベラルアーツとの接点

このように、リベラルアーツもMI理論と重なる部分が多い。そもそも、当初のMI理論で示された知能は7つであり、初期リベラルアーツの自由7科とは数の点で符合する。MI理論を現代版の自由7科と見る向きもあろう。

個別の項目で見ても、MI理論における言語的知能、論理数学的知能、音楽的知能は、それぞれリベラルアーツの文法・修辞、論理・算術・幾何、音楽というように、対応する項目が明確である。MI理論は初期のリベラルアーツをさらに発展させ、博物的知能といったより細分化された専門知を加えることでさらに完成度を高めた考え方だと言える。つまり、現代のリベラルアーツはMI理論を基礎として、そうした多様な知能の発達にこそ寄与すべきカリキュラムであるとも言えるかもしれない。

#### 4-5 提言：演繹的手法による連携研究の可能性

互いにこれほど多くの共通点を有するのであれば、今後のわが国におけるMI研究は、グローバル人材やリベラルアーツに関する諸研究とも連携しながら進めてはどうであろうか。それが本稿における提言である。

そのように提言する理由は、それぞれの内容について互いに接点があるということ以外にも、連携することである種のブレークスルーが得られるという期待が大きい。阪井（2018）による、日本でMI理論の研究が進まない理由について前章3-4で紹介したが、グローバル人材やリベラルアーツに関する諸研究とMI理論に関する研究が連携することで、それら3つの理由に代表される否定的な国内状況を打破出来る可能性があるのである。

例えば、グローバル人材やリベラルアーツに関する諸研究と連携することで、MI理論の研究が教育理論の中心へとより近づくことがまず期待出来る。さらには、グローバル人材やリベラルアーツに関する研究は高等教育が中心であるから、連携すればMI理論を教育の場で実践する余地は大いにあり、また中等教育までとは異なり「既存の教科の枠組み」を気にする必要もない。

## 5、考察と提言 II：帰納的手法による研究の可能性

前章で提言した連携研究は、演繹的なものが主流となるであろう。すなわち、ある種の教育を学校等で施し、それによって学生がどのように変化したかを実施直後に評価し、その後も定期的に定点観測を行ったり、フォローアップ調査を実施したりするような研究方法である。

例えば、大学生によるインターンシップや海外留学の成果について、その実施前後で多様な指標を用いて測定し、学生がどのような人物となったか、或いは現在どのような能力を発揮しているかなどについて卒業後も定期的に継続して調査を行うなどした場合、それこそが演繹的アプローチによる調査の典型と言えよう。

他方、例としては皆無と言っていいほど少ないものの、理論的には演繹的手法とは対極にある帰納的なアプローチによる調査・研究も可能なはずである。すなわち、誰が見てもグローバル人材或いは MI の持ち主であると思われる人物を選び、当該人物がどのような過程や教育を経てそうした能力及び知能を獲得したかを探るのである。サンプル数が多い場合にはアンケート等の統計的手法が、逆に極めて少ない場合やある特定の個人を研究対象とする場合には主として歴史学の分野で採用されている、オーラルヒストリーという手法が有効であろう。特定の個人に関する具体例については、まだ私論（試論）の段階ではあるものの、下記の補論を参照されたい。

MI に関する今後の研究及びその発展・連携について、筆者自身は大いに楽しみであるし、また自らも積極的に関与するつもりである。多くの助言や知己を得たい。

### 補論：MI 理論と超グローバル人材としての加山雄三

「私たちの知能の組み合わせはそれぞれ独自である」<sup>7</sup>と Gardner (1983) が述べたように、本来の MI 理論は、提唱された多様な知能のうち一つまたは複数を個人の多様性に応じて組み合わせたもの、というのが一般的な理解である。それならば、その究極の人材として、8 種類全ての知能に秀でた奇跡的な、いわば万能人のような人材も理論上は存在することになるが、これまでの研究ではいずれもそうした点への言及はない。実際にはそうした人物はいない、と誰もが思っているからであろう。

けれども、筆者にはただ一人、思い浮かぶ人物がいる。加山雄三 (1937～) である。その名前を聞いて、平均的な日本人はまずどのようなことをイメージするだろうか。俳優、タレント、或いはミュージシャンといったところがおそらく多数派であろう。主演した映画の影響から、若大将とニックネームで呼びたくなる人も多いかもしれない。いずれにしても、第二次大戦直後に生まれた、いわゆる団塊の世代以前の日本人にとっては、共に時代を過ごした極めて馴染みの深い人物であることは間違いない。

けれども、その彼が物理学に造詣が深く、優れた建築家であり、航海士であり、画家であり、陶芸家でもあることを、いったいどれくらいの人知っているだろうか。さらに、例えば音楽一つ取っても、彼が歌手であり、演奏家であり、作曲家であり、編曲まで行うこと、もっと言えばそのジャンルも演歌からポップス、果てはクラシックまでカバーしていることについて、さてどれほど知られているだろう。

<sup>7</sup> 松村 (2001) p.63.

流暢な英語の使い手であり、さらにその英語を用いて作詞を行っているという事実についてはどうだろう。加山雄三が父・上原謙（1909～1991）と母・小桜葉子（1918～1970）の間に生まれた二世俳優だという事実は割と知られていても、明治の元勳でありグローバルリーダーの魁とも言える岩倉具視の子孫であることはそれほど知られていないのではないだろうか。世の中に多大な影響を与えた人物はこれまで星の数ほどおり、そうした特定の人物に関する評伝も枚挙に遑がないが、現代においては加山雄三ほどその影響力や業績に関して誤解のある人物も珍しいのではあるまいか。斎藤（2017）が指摘するように、多芸多趣味は日本では蔑まれるという文化的背景もあるかもしれない。

しかし筆者には、加山こそMIを体現する人物として稀有な存在であるように思える。もしかすると、一般にイメージされるグローバル人材以上の、言わば超グローバル人材なのではないかとも思えて来る。筆者がそう考える理由について、より具体的にかつ詳しく、事実を中心として以下に記したい。研究対象として十分魅力的なことが、読み終わった後に理解出来るはずである。

### (1) 言語的知能

加山雄三が類い稀な言語的知能の持ち主であることを示すには、次の2つの例で十分であろう。まず、英語を理解し、流暢に話すことが出来る。加山が日本人離れした発音で英語を話す映像は、1986年から1989年までNHKで放送された『加山雄三ショー』など、テレビ等でも多く披露されている。特筆すべきは1966年にビートルズが来日した際、警備の関係から一切外出禁止となっていた彼らをホテルの部屋に訪ね、話し相手となってもてなした唯一の芸能人が加山だということである。

第二に、加山は弾厚作というペンネームを用い、作詞及び作曲活動を行っている。主として作曲が多いものの、「ある日渚に」「夜空を仰いで」など自身で作詞した作品も数点ある。中には後に山下達郎（1953～）がカバーした「プーメランベイビー」や、日本語版がヒットした「Dedicated（恋は赤いバラ）」など、全編英語による作品もあり、特に前者は事実上日本初の全編英語による流行歌だとされる。Gardnerによれば、言語的知能を体現した職業の例として詩人があることは既に述べた。

### (2) 論理数学的知能

加山は物理学が好きだと度々公言している。絶えず持ち歩いているというノートには、自身によるアインシュタインの相対性理論に関する説明や、宇宙の成り立ちについてのメモ等が記載されている。

より本格的なものとしては、「ゼロエミッション・ウルトラエコシップ」プロジェクトがある。ゼロエミッションとは、「エネルギーのリサイクルによって自然界への排出をゼロにすること」<sup>8</sup>で、加山がデザインし設計した究極のエコシップの図案が既に公開されている。これについて加山は、「東大の工学博士に造船会社、コンピューターやロボットアームに、素材の会社・・・最先端の技術が集結しているから、ハイテクの権化みたいな船ができると思う」と述べている<sup>9</sup>。

<sup>8</sup> 加山（2014）p.20.

<sup>9</sup> 同上

写真1 加山雄三が普段持ち歩く物理学ノート



出典 加山 (2014) pp.80-81.

### (3) 音学的知能

この項目については書くべきことが多過ぎて、とても收拾がつきそうもない。そこで、以下の3点を指摘しておくに留めたい。まず、加山(2010)の自伝によれば、叔母の演奏するバイエルを見よう見まねでオルガン演奏してみたのが8歳の頃で、これが演奏家としての加山の出发点である。以降、ピアノ、ギター、ウクレレ、ドラム等を演奏するようになる。

第二に、後にプロとしてデビューしてから発売され大ヒットした「夜空の星」は、加山が14歳の時に作曲したものである。これが作曲家・弾厚作の出发点であろう。日本初のフォークソングと言われる「旅人よ」やクラシックの「父に捧げるピアノコンチェルト」なども加山の作品であり、エレキギターの演奏用に作った「ブラックサンドビーチ」は後に本家のベンチャーズが演奏するまでになっている。

第三に、加山こそが日本におけるシンガーソングライターの草分けであるという事実である。シンガーソングライターは作詞・作曲・歌唱の全てを同一人物が行うことを指す和製英語であり、1970年代、井上陽水(1948～)や吉田拓郎(1946～)、荒井(松任谷)由実(1954～)らの登場と共に流行となった。加山は約10年も前から同じ試みを一人で実行していたことになる。

### (4) 身体運動的知能

1961年公開の東宝映画『大学の若大将』を契機として、加山はシリーズ全作品でスポーツ系のスター選手を演じている。これらはいくまでフィクションであるものの、スポーツマンとして名高い加山の特性を最大限に生かしているとも言えよう。特に、スキー部員を

演じた 1966 年公開の『アルプスの若大将』は、最も熱中したスポーツとしてスキーを挙げる加山（2010）自身の実像に最も近いかもしれない。

さらに 1962 年公開の『日本一の若大将』では、当時まだ珍しかった水上スキーを披露しており、多くの日本人はこの映画で初めて水上スキーというスポーツの存在を知ったと言われている。加山自身の公的なスキー歴としては、1959 年、1960 年の 2 度、神奈川県代表のスキー選手として国体に出場しているほか、学生時代には慶應義塾大学内のスキー大会にも出場し、1958 年には準優勝、1960 年には優勝を飾っている。

写真 2 慶應義塾大学内スキー大会におけるメダル

（後年のもの 筆者所蔵）



##### （5）空間的知能

加山の作った歌の中に「光進丸」という作品がある。加山自身が長年所有する船の名前で、2018 年に炎上しニュースになったことでさらに有名になった。他方、彼自身が専門家としてその設計に携わったことや、航海士・船長としてそれを操縦していることまではそれほど知られていないのではないだろうか。

加山（2010）の自伝によれば、初めてカヌーを自作したのは彼が 14 歳の時。「夜空の星」を作曲したのと同じ年である。その後、19 歳でモーターボートを自作し、徐々に船舶のデザインや設計に関心を高めて行く（上記（2）論理数学的知能の項も参照）。

加山がこれまで画家として活動していることも意外に知られていない。1990年代に4冊、2000年代には9冊も画集を出版し、1996年には新宿三越での個展も開催しているのに、である。当初はあくまで我流であったものの、平成に入ってからプロの画家に師事しながら、アドバイスを受けてたりもしている。そうしたプロの画家の一人に、社団法人二紀会理事の西嶋俊親がいる。かつて、三越美術館の関係者から、初めて雄三の絵数点を見せられた西嶋はその場でこう言う<sup>10</sup>。

この波は海辺で暮して居る人でなければ描けないし、この雪は古い雪と新雪が描きわけてあって雪国に暮している人の様でもありますね。

実はこの時、西嶋はそれらの絵が加山雄三の作であるとは知らされていなかった。後に美術館関係者から種明かしをされ、それがきっかけとなって西嶋は加山本人と知り合うことになる。後日、初めて雄三のアトリエを訪れた西嶋は、油絵や水彩画、デッサンのような美術作品ばかりでなく、楽器や船の設計図に代表される多くの実用的な作品をも目にして圧倒されたという。

GardnerによるMIの理論では、空間的知能を体現した職業の例として航海士、グラフィック・アーティスト、建築家等があるが、以上見てきたように加山はこれらに該当していることが明らかである。

#### (6) 対人的知能

Gardnerは、対人的知能を体現した職業の例として俳優を挙げており、加山が俳優として長年活躍していることを述べればここでは十分であろう。それ以外にも、先に挙げたNHKでの『加山雄三ショー』などに代表される、加山とゲストとの対談番組は現在まで数多い。優れた対人的知能を持つことの証左として、そのことも付記しておきたい。

#### (7) 内省的知能

Gardnerによる内省的知能とは、自分を理解する能力を指すが、加山がどのように自分を理解しているか、その内面にまで踏み込むことは不可能である。それゆえ、この項では加山が人生最大の内省を経験したであろう危機と、そこからどのように復活してきたか、いわゆるレジリエンスの問題に置き換えて述べてみたい。

加山にとって、人生最大の危機は経営に参画していた会社の倒産事件であっただろう。大阪で万博が開かれ、日本が高度経済成長の真っ只中にいた1970年、茅ヶ崎パシフィックパークホテルと岩原スキーロッジを経営する株式会社パシフィック・パーク・ジャパンが23億円の負債を抱えて会社更生法の適用となった。同社は加山の叔父が経営していたため、親族として加山自身及び父の上原謙も経営陣に名を連ねていた。

加山の負債額は5億円であった。事件直後に加山は仕事を投げ出して一時米国に逃亡するが、帰国後すぐに記者会見を開き、債権者には文字通り土下座をして謝罪に回ったという。イメージの悪化した俳優・加山の仕事は当然減る。「もうこれで終わりだなといった

<sup>10</sup> 加山 (1996) p.62.

思いが頭をよぎるようになった」と加山は言う<sup>11</sup>。

さらにその4年後、今度は死の一手手前まで近づくような大事故が加山を襲う。その時の様子を、加山自身は次のように書いている<sup>12</sup>。

圧雪車がカタカタカタとバックして、一気に僕を巻き込んだ。とっさの機転で体を下向きに回転させようとしたが回りきれず、斜め下向きになった。そこでバキッと骨の折れる音がして、僕の上を圧雪車の巨体が縦断していった。あおむけだったら内臓破裂、うつぶせでも背骨をやられていたはずだ。

こうした不幸な出来事に巻き込まれても、加山は決してくじけず、地道な努力によって復活して来た。「とにかく収入を少しでも増やすため、ナイトクラブやキャバレー回りもよくやった」という<sup>13</sup>。しかし、「キャバレーに行くと、大半のお客さんは僕の歌などそっちのけでホステスさんに夢中だった」らしい<sup>14</sup>。加山にとっては文字通りの栄光と挫折であり、絵に描いたようなスターからの転落はさぞや辛い経験であったろう。

#### (8) 博物的知能

Gardnerによる博物的知能は、動植物や人工物の分類を指している。このうち、加山は自宅に猫を飼うなど動物好きとして知られるが、動植物に特に詳しいという情報はない。

他方、人工物については加山が陶芸家であることを紹介すれば良いだろう。2003年から備前焼の名工・山本雄一の弟子となり、2006年には熱意が高じて自宅に専用の窯を設けるまでになる。近年は清水焼の絵付け、さらには漆器にも挑戦するなど、多くの作品を発表し続けている。

#### 参考文献

- 大西好宣 (2018a) . 「グローバル人材とは何か—政府等による定義と新聞報道にみる功罪」『人文公共学論集』第36号, pp.168-183., 千葉大学
- 大西好宣 (2018b) 「米4大学にみるリベラルアーツ教育の現状と改革」『JAILA JOURNAL』第4号, pp.14-25., 日本国際教養学会
- 加山雄三 (1996) 『すべて愛なんだ—加山雄三画集』近代映画社
- 加山雄三 (2010) . 『若大将の履歴書』日本経済新聞出版社
- 加山雄三 (2014) . 『若大将 EXPO 夢に向かって いま』株式会社ドリーミュージック
- 経済産業省 (2010) . 『産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会 報告書～産学官でグローバル人材の育成を～』
- 斎藤兆史 (2017) . 『めざせ達人！ 英語道場 教養ある言葉を身につける』ちくま新書
- 阪井和男 (2018) . 「MI 理論とその大学教育への応用—アクティブラーニング設計原理と

<sup>11</sup> 加山 (2010) p.160.

<sup>12</sup> 前掲書 p.190.

<sup>13</sup> 前掲書 p.183.

<sup>14</sup> 前掲書 p.184.

としてのMI理論の可能性—』『IEICE Fundamentals Review』 Vol.11 No.4., pp.266-287., 電子情報通信学会

首相官邸 (2012). 『グローバル人材育成戦略』

末次安里 (1981). 『君は加山雄三になれるか』 山手書房

藤山一郎 (2012). 「日本における人材育成をめぐる産官学関係の変容—『国際人』と『グローバル人材』を中心に」『立命館国際地域研究』 第36号, pp.125-142., 立命館大学

松村暢隆 (2001). 『MI:個性を生かすMIの理論』 新曜社

宮田敏近 (1991). 『アメリカのリベラルアーツ・カレッジ』 序章, 玉川大学出版部

文部科学省 (1988). 『我が国の文教政策』

文部科学省 (2011). 『産学官によるグローバル人材の育成のための戦略』

山田順 (2013a). 「日本人の的外れな『リベラルアーツ論』」

(<http://toyokeizai.net/articles/-/13697>) 東洋経済オンライン

山田順 (2013b). 「本物のリベラルアーツを日本人は知らない」

(<http://toyokeizai.net/articles/-/13769>) 東洋経済オンライン

吉見俊哉 (2016). 『「文系学部廃止」の衝撃』 集英社

『看護教育』 第57巻第12号の特集「身体知をリベラルアーツに」(医学書院発行)における以下5編の論文

西山悦子 (2016). 「看護教育危機の時代:なぜ今、『身体知』か」 pp.958-963.

菊池麻由美 (2016). 「看護職者らしさを支える知覚:ある看護学生の『身体知』が変わるとき」 pp.964-969.

大橋容一郎 (2016). 「身体知の構造:『身体で知る』ことの三段階」 pp.970-978.

鈴木守 (2016). 「『身体の教養教育』改革」 pp.979-985.

山本敦久 (2016). 「新たな身体モデルに向けて」 pp.986-991.

Gardner, H.E. (1983). *Frames of Mind: The Theory of Multiple Intelligences*, Basic Books.

Gottfredson, L.S. (2006). "Social Consequences of Group Differences in Cognitive Ability (Consequencias sociais das diferencas de grupo em habilidade cognitive)" In Flores-Mendoza, C.E.; Colom, R. *Introducau a psicologia das diferencas individuais*, 433-456., ArtMed Publishers.

Scarr, S. (1985) "An author's frame of mind[Review of Frames of Mind: The theory of multiple intelligences]" *New Ideas in Psychology*, 3(1):95-100., Elsevier.

Sternberg, R. J. (1983). "How much Gall is too much gall? Review of Frames of Mind: The theory of multiple intelligences" *Contemporary Education Review*, 2(3):215-224., American Educational Research Association.

Sternberg, R. J. (1991). "Death, taxes, and bad intelligence tests", *Intelligence*, 15(3):257-270., International Society for Intelligence Research.

Sternberg, R. J. (1994). "Thinking Styles: Theory and Assessment at the Interface between Intelligence and Personality" In R. J. Sternberg, & P. Ruzgis (Eds.),

*Intelligence and Personality*, 169-187., New York: Cambridge University Press.

White, J. (2005). *The Myth of Howard Gardner's Multiple Intelligences*, ioeLife,  
London: Institute of Education, 1, 9.

White, J. (2006). *Intelligence, Destiny and Education: the Ideological Roots of  
Intelligence Testing*, London: Routledge.